木下尚江著作集

第四卷

明治文献

木下尚江著作集第4巻（第八回配本）

昭和四十五年八月三十日第一刷発行©

定価一五〇〇円

著者　木下尚江

発行者　藤原正人

発行所　株式会社　明治文献

東京都豊島区池袋2丁目1070

振替・東京36290番

電話・東京(984)0521

印刷　江明印刷所

製本　昭栄堂

1391—040008—8309

序

一、日露戰爭は予をして小說を書かしめたり、「火の柱」一篇と「良人の自白」三篇とは誠に予に取て日露戰爭の好個紀念と云ふべし、予等非戰論者は非愛國者として政府と國民との憎惡の府となれり、而して此間文藝界の門外者たる予の著作が、奇怪にも幾度か版を更へて意外にも弘く頒布せられしことは、日本國民の心理的發展に注意する識者に向て、敢て一考を煩はさんと欲する所なり。

一、「良人の自白」完結を告ぐるに先ちて予等は平民社を解散せり、是より先き幸德傳次郎君は七月廿八日を以て、西川光二郎君は九月廿六日を以て巢鴨の獄を出で來れり、西川君出獄の日、幸德、堺、西川、石川、及び予の五人、堺君の新宅に會して同志今後の運動方針を協議し、熟慮愼議遂に平民社の解散を決議し、十月七日夜を以て最も森嚴に解散式を擧行せり、嗚呼平民社、彼も亦た日露戰爭の產兒なりき、戰爭と共に生き、戰爭と共に逝く、彼が二十有餘月間の苦鬪難戰は、永遠に日本國民の心裡に印刻せらるべきを疑はず、故に予は彼の天

死を見て痛く之を愛惜すと雖も、而かも慟哭せざるなり。

一、日本に於ける社會主義の發展如何、是れ今後の一大事件なり。

一、予は尙ほ小說を書くべきや否や、予自ら知らず。只だ本篇の結末唐突に失して自ら不滿に堪へざるものあれば、或は明春を待つて「良人の自白(餘談)」に着筆せんかと考へつゝあり。

明治三十八年十月下旬戒嚴令の下に於て

木下尙江誌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

小説

良人の自白（後篇）

木下尙江著

（一の一）

飲めぬ酒を無理に飲んだので、俊三は徹夜心裂け頭も割れるばかりの苦しみ、梅次は殆ど微睡ともせずに介抱して居たが、夜明方から酒氣の稍々薄らいでか、俊三は宛然死んだように眠つて仕舞つた、

梅次は鬢を搔きあげながら、どんよりした目で帳場へ遣つて來た『じや姐さん、私、歸りますからね——』

『然う』とお浪はパッちり目を上げた『少し臥て行つたら可いじやないかね、其樣眠むさうな目をしてさ』

『ですけれど、歸れつて言つて來た時に歸へらなければ、又た八釜しいんだもの』

『擽やしないやね、此方だつてお客様だもの』
『それは然ですけれど――皆なに又た何の角のと言はれるのが五月蠅から』
『白井さんだから？』
『はア』と梅次は嫣然した、
『傍輩衆が何と言はうと、御主人様への御奉公さへキチンと勤めて置けば可いじや無いかね、男に惚れるは天下晴ての女の自由だもの』
『それは然ですけれど、然ばかりも行れないのですもの』
『お前さんは氣が弱くて駄目だよ』
『だつて姐さん、』
『焦慮たいね』とお浪はポンと煙管を叩いた『それは其れで、梅ちやん、白井さんは可いの？』
『はア、今能く眠て居らつしやるの』
『隨分酒癖の惡い人ね』
『あら、姐さん、然うじやありませんよ、一寸も酒を召し上らないのですけれど、昨夜は如何

しなすつたんでせう、無理飲なんですものね』帶引きしめて梅次は立ち上つた『何卒姐さん、お願ひ申しますよ』

『知らないよ、大事な色男を乘てゝ置いて――誰かコッそり盗みでもしたら如何するの？』

『だから姐さん、番して下ださいつて、お願ひするぢやありませんか』

『番人の盗み食つてこともあるからね』

『姐さんなら搆ひませんわ』

『有難う』とお浪は身を反らして笑つた『本當に盗んだら大騒ぎだろうね』

『それはまアね』と梅次も笑ひながらに框を下りたが、カランと格子戸を開けて物憂げに歸つて行つた、

『あの妓も可哀そうね』とお浪は表の方を見て居たが、煙草の煙徐ろに吹きながら、熟と目を閉ぢて何やら深く考へ込んだ、

時計の鍼が正午近くなつた、

お浪はチラと仰ぎ見たが、『最早こんなになるだろうか――白井さんは如何なすつたでせう』

言ひながら、やをら起つて俊三が臥て居る部屋の前まで行つたが、寂として何の物音も無い、お浪は静かに襖を明けたが、俊三は胸の邊まで夜具を脱いで、グッたりと眠つて居るのだ、頬も唇も血の氣なく、眉根には昨夜の酔の苦しさが未だ其影を殘して居る、

『本當に能く眠んで居らつしやること』と獨語ちながら、窃と入つて枕頭の水器を取り上げたが、拍子に蓋がチリンと鳴つた、其音にピクリと俊三の夢驚いて、思はずムクリ頭を上げた、

『あら、御免下ださいまし、白井さん』とお浪は振り返つて嫣然した『あのお水を取り代へようと存じましてね』

俊三は重そうな目を見開いて、面目無げにお浪を見た。

『あの、お頭は如何です』

『有難う、大分可いようですが、――あゝ飛んだ大失態を演りました』

ほゝゝとお浪は笑つて退けた『少し白井さん、お頭を揉みませう』

スウと立つて俊三の背後に廻つた、

『最早其れには及ばない、大分可いから』

『まア、貴方も御遠慮深くて居らつしやいますことね、私、梅ちやんにシツかり頼まれたのですから、御粗末して又た彼妓に叱られると大變ですものね』

俊三の頬にはポツと人間の血色が潮した『――それよりも最早、何時だろうね』

『そうですね、未だ十一時一寸過ぎた位のものですよ』

『えッ、最早、そんなになるのか』

『吃驚なさるのじやありませんよ、今日は日曜ですもの、梅ちやんも今に參りませう』

（一の二）

『一杯めし上がれ』とお浪が注いで出す冷水を、俊三は殆ど呼吸もせずにグッと呑み干した

『あゝ、甘い！今一つ下ださい』

『不可ませんよ。白井さん、そんなに召しあがるとお毒になりますから――じや今半分にしてお貰きなさいまし、ね』

言はれるまゝに俊三は、半杯の水を傾けて、ホッと太息を吐いて復た熟と枕に就いた、

お浪は摺り寄つて其の頭を揉んで遣るのである『お苦しう御座いますか、まだ斯樣にお頭が熱

つて居らつしやるんですもの』

『なに、最早大丈夫です、然かし昨夜は實に頭が割れて仕舞ふのかと思つたのです』

『貴方が無理に御酒を召しあがるからつて、梅ちやんが如何に心配して居たか知れませんよ』

『面目ないことでした』

『あら、貴方、御介抱が出來たので彼妓に取つては何程幸福であつたか知れないんですもの、ですけれど白井さん、餘り御無理をなさると不可ませんよ、眞個にお體に障りますからね』

『私は酒など飲んだこと無いのだ、けれど少し氣色の惡い所へ、加藤が酒も飲めないかと云つて馬鹿にするもんだから、ツイ我慢をしたんだが、此の方が何程馬鹿とも知れなかつた』

『加藤さんと御酒の上での太刀打は、白井さん、御無理ですよ、猛々加藤と異號付きの人ですもの、ですけれど萬更召しあがらないのも、殿方には拍子の惡るいものですから、是れからはぼウつと顏にお發し遊ばす位の所でお止しなさいましよ』

頭を揉んで貰ふので、俊三は良い心持さうにウト〳〵とし始めたが、やがてまた眠入つて仕舞つて、微かな鼾が奥の方に聞ゆるようになつた、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

『まア、可愛いお顔をして』とお浪は手を休めて見て居たが、『深志屋の小指との噂なぞ、御本人を見れば眞實とは思はれないようね、若しあつたとすれば如何しても女の方からの仕業だよ其に違ないのね、一寸小腹が立つじやないか』嫣然しながらお浪は、搔き亂した俊三の頭髮を窃と梳いて遣つて居る、

『主婦さん』と女中の低い聲が襖の外に聞えた『主婦さん、ちよいと』

お浪は寢顏を見ながら音せぬように立ち上がりて、襖を開けた『なに？』

『あの、旦那樣がお見へになりました』

『さう、珍らしいこと』とお浪は小櫛に鬢を搔き上げながら『お前ね、白井さんがお目ざめになつたらね、軟に煮て御飯をお上げ申してお呉れよ、氣を付けてね、』そして小急ぎに居室へと行つた、

お浪の居室には深志屋源兵衛が羽織のまゝに臥そべつて、酒氣ある顏に煙草をフカリ〳〵と吹かして居るのだ、

『入つしやいまし、大層御機嫌ですことね』

『何物だい、客は』

『なアに、酔つぶれさね、面白くも無い、藝妓が歸つちまつたもんだからね』

『誰だい』

『梅次のさ』とお浪は一服吸ひながら、チロリと源兵衛を見遣つた『貴方も隨分ね』

『何が』

『何がッて、梅ちやんを口説いたつて言ふじや無いかね』

『虛言ふなよ』

『駄目ですよ、梅ちやんが白狀して居るんだから、――そりや成程賣物に買物だから何人を口説きなさろうと、男の勝手ですけれど、彼の通り私の妹同樣にして居る妓じやありませんか、餘り私の顏も踏つぶさないようにして下ださいよ、後生ですから』

『只だ笑談に言つたのを、梅次が餘り眞面目に反ねつけるものだから、ツイ揶揄い過ぎたのさ、――彼妓の客つて何人だい』

『矢ッ張氣に懸るのね、憎らしい』とお浪は横目に笑つたが『辯護士の白井さ』

（一の三）

『白井？』と覺えず源兵衛は目を据へた、

『はア、昨夜加藤さんが引ッ張つて始めて來たの、飲んだくれの仕樣の無い奴ね』

『其樣奴の部屋へ、何も行くに及ばぬじや無いか』

『厭な、誰か好いてゞも行つたように、だつてお客樣なら仕樣が無いわね』

『こゝが己のと言ふことを知つて來たのか、如何だ』

『さア、實は私も其を考へたの、だつて、知らないこともあるまいものね、餘まり圖々しい奴だと思ふのさ、――ですけれど、ね、私また坊うも思ひますの、如何かすれば世間の噂の方が虛報かも知れないと』

『如何して』

『如何してつて、貴方、彼樣男に惚れる女はありませんよ、それとも貴方の奥樣には好く見へたのかも知れないけれど』

源兵衛は默つて目を閉ぢた、

『怒りなすつて？奥様の悪口なぞ申上げて濟みませんで御座いました』
『其様話は止せ』
『それ御覽なさい、何の角のと仰しやつても、矢張未練が殘つて居らつしやるんだもの――そりや幼馴染の戀女房だもの、御道理さね』
『止せつたら、お浪』
『はい〳〵止しませう』とお浪は暫ばし熟と考へて居たが『ね、旦那、お顏を見さへすりや言ふようですけれど、何卒一日も早く後妻を貰つて頂戴な、私、氣になつて夜もロクに眠られないんですもの』
『貰ふも貰はぬも此の源兵、徧の勝手さ、何もお前が氣を揉むに及ばぬじや無いか、』
『だから貴方は、私の苦勞を一寸も察してお呉んなさらないと言ふんですよ、そりや成程貴方に早く奥様を貰つて下さいと私の口から言ふのは、變に聞えるかも知れないのね、私が後釜に据はりたい謎でも掛けるように見へるかも知れないけれど、そりや旦那、餘り可哀そうじやありませんか、正直な處私だからつて、斯うした日陰の身で居るよりも、一日なり半日なり、晴れ

て貴方の奥様と言はれゞは女性の本望さね、けれど、其は貴方の御名譽に拘る位のことは私だつて知つてますよ』

『解つて居るから可いじやないか』

『解つて居て下ださるなら、何故「お前が氣を揉むには及ばない」なんて、邪慳なことを仰しやいますの？少しは私の身になつて考へて下ださいましよ、世間の人は奥様が御自分の不義の爲めの御自害とは知らないで、只だ千鳥のお浪と云ふ者のある爲めだと言ふじやありませんか奥様が飛んだ貞女になつて、私一人が惡婆に化るんですもの、情ないにも大抵程がありますよそりや私だからつて女性ですもの、貴方に早く女房を貰つて下ださいと言ふのは、何程苦しいか知れたものじや無いわ、是れも婆婆の義理なら仕様が無いの』

『あゝ、貰ふよ〳〵、然かし狗の子や、猫の子を貰ふような手取早なワケにも行くまいからな』

『無論ですよ、深志屋源兵衛の奥様ですもの擇りに擇つた上で無ければね、今度は華族か何かの御姫様の、若い琦麗なのでもお貰いなすつて、澤山可愛いがつてお上げなさいまし』ジロリと源兵衛の顏を見て、溜息吐いて横を向いた、

『何だ、詰らないこと、十五六の小娘の言ふことだ』と源兵衛は笑つた、
『左樣さね、最早此樣お婆さんになつちや何と思つても追つ付かないからね』
『又たお株か』
『眞實ですよ、男は白髮にならうと、禿頭になろうと搆やしないが、女は三十の聲が掛かると最早お仕舞だもの、――ですけれど、貴方、藝妓など後妻へ入れなすつちや承知しませんよ』
『心配しないでも可いよ』
『一寸も當になりませんからさ』
顏見合はせて打ち笑つた、
先刻の女中が襖を開けて顏を出した『主婦さん、あのお客樣が歸へると仰しやいますが――』
『未だ居たの、早く歸へしてお仕舞いよ』
女中は怪訝な目をして襖を閉ぢた、

（二の一）

此より後俊三の足は繁々千鳥の門へ運ばれて、醉ふては其まゝの泊り込み、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook